

19世紀中葉のヒヴァ=ロシア関係再考  
—— シュクルッラー・アガのロシア，オスマン両帝国への  
派遣について ——

Reconsidering Khivan-Russian Relations  
in the Mid-Nineteenth Century:  
Shukrullah Agha's Missions to the Russian and Ottoman Empires

塩谷哲史  
Akifumi SHIOYA

**Abstract** Muhammad Amin Khan, the ruler of Khiva, dispatched Shukrullah Agha on missions to Russia and the Ottoman Empire from 1846 to 1854. This author focuses on these missions and, after examining the contents of Muhammad Amin Khan's letters to the Russian and Ottoman Empires, reached the following conclusion. Previous studies have emphasised that fearing a repeat of Perovskii's failed military expedition to Khiva in 1839-1840, the Khanate of Khiva signed a treaty with the Russian envoy Danilevskii in January 1843, which the Khivan side later violated. However, through a close analysis of Muhammad Amin Khan's letters, the author demonstrates that the treaty included a few favourable provisions for the Khivan side as well. The treaty safeguarded the activities of the Khivan subjects and their properties on Russian territory. Compensation for the Khivan merchants who had been detained and whose property was confiscated in Russian territory seemed to have been negotiated. In addition, the treaty shelved the demarcation of the border between Khiva and Russia on the Kazakh steppe. However, the Russian army began constructing fortresses in the western and southern parts of the Kazakh steppe in 1846, resulting in a military clash between Russia and Khiva in the lower Syr River basin in 1847. The study thus concludes that the treaty was violated by the movements of the Russian army in the Kazakh steppe.

**Keywords** The Khanate of Khiva, Kazakh steppe, Muhammad Amin Khan, Nicholas I, Russo-Khivan Treaty of 1843

## はじめに

本論は、ヒヴァ・ハン国（1512-1920年）の君主ムハンマド・アミン・ハン（在位 1846-1855年）が1846年、1852年の2度にわたりロシア帝国に、また1848年、1854年の2度にわたりオスマン帝国に派遣したシュクルラー・アガ（生没年不詳）の使節行に注目し、彼がロシア、オスマン両帝国にもたらしたムハンマド・アミン・ハンの書簡の内容を検討することで、その派遣の背景にあったヒヴァ=ロシア関係の推移について考察する。

1804年ヒヴァ・ハン国に成立したコングラト朝（1804-1920年）は、第2代ハン、ムハンマド・ラヒーム（在位 1806-1825年）の治世の1811年ホラズム・オアシスの政治的統合に成功すると、その後継のアッラークリ（在位 1825-1842年）、ラヒームクリ（在位 1842-1846年）、ムハンマド・アミンの三人のハンたちの治世に、北はカザフ草原、西はカスピ海東岸、南はコベト・ダグ北麓からムルガブ流域、東はシル川下流域からアム川中流域を結ぶ線に至る広大な地域にその影響力を広げていった。こうした影響力は、連年のように行われるハンやハン国高官が組織した軍事遠征、その過程での諸集団からの服従表明と税の徴収、さらにムルガブ、アトレク、シル各河川流域への拠点建設を通じて確立された。しかしこうした影響力の拡大は、周辺勢力との対立をも生み出した。とりわけブハラ・アミール国との間では、ムルガブ川流域のメルヴ、アム川中流域のチャルジュイをめぐる争い、ブハラ領内の住民のヒヴァ領内への強制移住に起因した対立と和平が繰り返された。また19世紀前半を通じて、トルクメンが行う遠征行によってシール派イラン系住民が捕虜とされ、ヒヴァの市場において「奴隷」として売買されたことから、イランのガージャール朝は、そうした捕虜の返還とトルクメンの遠征行の停止をヒヴァに求めた。

カザフ草原に支配を確立しつつあったロシア帝国は、こうしたヒヴァ・ハン国の影響力拡大を、帝国臣民と見なしていたカザフへの干渉と考えた。ロシアは、1730年カザフのハンの1人であったアブルハイルが保護を求めてきたことを臣従申請と解釈し、その後要塞建設、ハン家の内紛の扇動、ハンの任命権の掌握を通じて、カザフを従属させ [宇山 2018: 230]、草原にその支配を広げていった。さらに1822年カザフの中ジュズ、1824年には同小ジュズのハン位をそれぞれ廃止し、草原の大半において現地有力者を取りこみながら統治体制を構築し、これに反発したケネサルの反乱（1837-1847年）も抑えこんだ [宇山 2018: 230, 長沼 2015]。

こうしたロシアのカザフ草原における統治確立の過程で、1830年代以降のヒヴァ・ハン国との関係はどのように変化したのだろうか。ロシア皇帝ニコライ1世（在位 1825-1855年）の勅令により、1838年帝国南東境にいたヒヴァ臣民全員が拘留され、彼らの商品および財産の処分が禁止された。ロシア政府はこれを、ヒヴァ・ハンがロシア人捕虜の売買禁止を実施しなかったことへの対抗措置であると説明した。またオレンブルグ州総督ペロフスキー（在任 1833-1842年および 1851-1857年）は、アッラークリ・ハンに書簡を送り、ロシ

ア人捕虜の解放とともに略奪行為の禁止、ロシア臣民であるカザフへの介入停止などを求めた。1839-1840年には、「冬の遠征 Zimnyi pokhod」と呼ばれる、ペロフスキー率いるロシア軍のヒヴァ遠征が行われたが、小規模な衝突が起きたのみで失敗に終わった。このように、1830年代末からロシアはヒヴァ・ハン国に対して強硬姿勢に転じ、軍事遠征に着手したものの、1840年には失敗に終わった。その後ロシアは実力行使から交渉へとヒヴァに対する姿勢を転換し、1841年5月-12月にかけてニキフォロフ、1842年8月から1843年2月にかけてダニレフスキーそれぞれが率いる使節団をヒヴァに派遣し、露暦1842年12月27日<sup>1)</sup>付で両国間の条約が締結された。この条約は、アッラークリ・ハンの勅令発布という手段で公布され、ヒヴァ領内でのロシア帝国臣民の人身・財産の保護および捕虜取引の停止、両国間貿易における関税引き下げなどを規定した。しかし、ヒヴァ側はこの条約の規定を遵守しなかったとされる。とりわけヒヴァ側が条約に違反してカザフへの介入を続けたことへの対抗措置として、1847年ロシア軍は再び実力行使を行った。つまりカザフの冬営地があり、オレンブルグとブハラを結ぶ交易路が通るシル川下流域にあったヒヴァ・ハン国の要塞をロシア軍が占領・破壊するとともに、アラル海の河口から60ヴェルスター上流のシル川沿岸にライム要塞を建設した。その後この要塞は、交易路上の渡河点を掌握するとともに、1853年にはシル川のより上流にあったコーカンド・ハン国の要塞アク・マスジドを占領する拠点となった。同時にこの要塞は、アラル海艦隊編成の基地となり、ロシア軍艦が初めてアラル海に進出するようになった<sup>2)</sup>。

しかし以上の諸事件の推移は、同時代のロシア側の視点にもとづき叙述され、そうした叙述は、ソ連期以降の研究にもおおむね踏襲されている。一方で、ヒヴァ側がロシアのカザフ草原進出の過程およびヒヴァとロシアとの関係の変化を同じ視点で見ているのかについては疑問が残る。本論は、ロシア側がヒヴァに対して交渉から実力行使へと姿勢を転じたころに、1846年ロシア、1848年オスマンの両帝国に派遣されたシュクルラー・アガが両国君主に届けたムハンマド・アミン・ハンの書簡の内容を分析し、1840年代のヒヴァ側から見たロシアとの関係の推移を再構成したい。

近年、19世紀前半から中葉にかけてのヒヴァ・ハン国の対外関係史は、おもにロシア帝国との関係史に多数の蓄積がある<sup>3)</sup>。その代表例は、ハルフィンとそれに依拠したグラモフの研究であろう。彼らはロシア帝国外交政策文書館(AVPRI)所蔵文書を利用しながら、1839-1840年のペロフスキー率いるロシア軍のヒヴァ遠征失敗から、ダレニフスキー使節団のヒヴァ訪問と露暦1842年12月27日付での条約締結、その後のカザフ草原におけるロシ

1) 本論で用いる日付は、特別な注記(「露暦」「ヒジュラ暦」等)がない限り、西暦の日付である。

2) 以上の経緯については、以下の文献を参照 [Zhukovskii 1915: 110-142; 塩谷 2014: 86-88; 塩谷 2018: 67-68]。

3) 以下の研究を挙げることができる [Veselovskii 1877; Zhukovskii 1915; Muhammadjonov and Ne'matov 1959; Becker 1968; Niazmatov 2010; Kochnev 2017]。

ア側の要塞建設とヒヴァ側の抗議について詳述している [Khalfin 1974: 272-293, 312-331, 346-360; Gulomov 2005: 244-257]。しかしこれらの研究は、ロシア側の史料のみに依拠し、外相、外務省アジア局長、オレンブルグ総督などロシア政府上層部の見解にもとづく、ロシア側の視点での事件の経過の再構成にとどまっている。またロシアの中央アジア進出の背景に、ロシア国内で発展する資本主義を支える産業界の後押しがあった点を強調している。最近モリソンは、英露角逐や国内産業の要請といった征服活動の外部の、間接的な要素を強調するハルフィンらの研究を批判し、現地君主たちの主体性とロシアのプレゼンスの利用、西欧列強と伍すはずの帝国の威信へのこだわり、現地協力者の存在、西欧列強の行動を参照して正当化された暴力、軍人たち個人の役割、環境といった、征服に直接関与した一つ一つの要素が重ね合わせられながら、ロシアの中央アジア軍事征服が形作られていった過程を描いた [Morrison 2020]。しかし本論で扱う条約締結後のヒヴァ、ロシア両国間の変化については、もっぱらロシア側の視点から見た軍事面での行動を考察の対象にしており、交渉の経過についてはハルフィンらの研究に付け加える点はない [Morrison 2020: 108-113]。

ブハラ、ヒヴァ、コーカンドに代表されるウズベク諸ハン国とオスマン帝国との関係史は、国内外で数多くの実証研究が蓄積されてきたが<sup>4)</sup>、その対象はメフメト・サライによる概観と史料の紹介 [Saray 1994: 40-45, 62; Saray 2003: 214-215, 288-292] を除けば、ブハラ、コーカンドとオスマン帝国との関係に限られている。近年、ウズベキスタンを中心に、その歴史的な国家性 *davlatchilik / gosudarstvennost'* の存在を証明すべく行われているヒヴァ・ハン国の対外関係史研究が盛んになっている [Agzamova et al. 2016; Otamurodova and Abdurahimov 2015]。アッラエヴァの研究は、そうした中で最も包括的であり、18-19 世紀のヒヴァ・ハン国とブハラ、コーカンド、イラン、カザフ草原、ロシアとの関係を論じているが、二国間・二勢力間関係の分析が総合されていない [Allaeva 2018]。そのため、例えば本論で扱うようなヒヴァとオスマン帝国との関係が、同時代のヒヴァとロシアとの関係とどのように関連していたのかという問いには答えてくれない。

ここでロシア、オスマン両帝国に派遣されたシュクルッラー・アガについて述べておきたい。彼はアッラークリ・ハンからムハンマド・アミン・ハンの治世にかけて、ヒヴァから各地に使者として派遣されたが、その派遣先は多岐にわたる。コングラト朝宮廷で書かれた年代記から確認できるだけでも、1838 年 8-11 月にヘラート、1842 年 11 月までと 1843 年 1 月からブハラ、1853 年 4 月-1854 年 1 月にコーカンド、また本論で述べるように 1846 年 10 月-1847 年 8 月、1852 年 1-12 月の 2 度にわたりロシア帝国、1848 年 4 月-1850 年 9 月、1854 年 12 月-1861 年 12 月の 2 度にわたりオスマン帝国へと派遣されている [Riyāz: 727b-728, 753a-b; *Zubdat*: 95; *Jāmi'*: 70, 99, 112, 145, 152, 161, 163, 180, 187; *Gulshan*: 244a-

4) 以下の研究を挙げることができる [Baque-Gramont 1972; 澤田 1988; 澤田 1990; 堀川 1991; Saray 1994; Saray 2003; Komatsu 2006; Andican 2009; Vasil'ev 2014; Can 2020]。

249b]。しかし彼の出自やその後についてはほとんど知られていない。ヒヴァの年代記にはホラズム南部の都市カト出身のサルトの「名士」であると述べられているが<sup>5)</sup>、生年は明らかではない。彼はイスタンブル滞在中、オスマン帝国の大宰相メフメト・エミン・アーリー・パシャ Şadr-i a'zam 'Ali [ママ] Pādīshāh<sup>6)</sup>の知己になったという [Gulshan: 245b]。2度目のオスマン帝国への派遣に際して、イスタンブルで比較的長期間滞在できた理由に、彼が大宰相の厚遇を受けていたことも考えられよう。しかしヴァーンベリがヒヴァで再会を果たしたとき、シュクルッラーは、ヒヴァ内城内のムハンマド・アミン・ハンのマドラサに居室を構えていたものの、何らの役職にも就いていなかったと述べている [Vámbéry 1864: 153-154]。シュクルッラーがロシア、オスマン両帝国での見聞にもとづき得たであろう知識は、当時のハン国では活かされなかったのだらうという想像を私たちに抱かせる。ただ、シュクルッラーのロシア、オスマン両帝国への使節行そのものについては、参照可能な史料が多い。そうした史料とは、おもにロシア帝国外交政策文書館、トルコ共和国総理府オスマン文書館 (BOA) に所蔵されている文書史料で、その一部は公開されている<sup>7)</sup>。本論はそれらに加えて、コングラト朝ヒヴァ・ハン国の年代記、文書、およびハン国を訪れた旅行者たちの記録を用いていく。

- 
- 5) Gulshan: 244a。ブレーゲルは、ヒヴァ・ハン国の年代記の記述を分析し、トルクメンの事例などから例外はあるものの、バイの称号を帯びた人々の大部分がサルト出身、アガ、アルバーブの称号を帯びた人物の大部分がサルトの名士であったことをつきとめた。また旅行記、ソ連期の民族誌学調査記録を用いて、ホラズムにおいてサルトが、元来イラン系の血統を引きながらテュルク化した集団として、16世紀初頭この地を征服したウズベクからは区別された存在であったことを明らかにした [Bregel 1978]。
- 6) メフメト・エミン・アーリー・パシャ Mehmed Emin Âli Paşa (生没 1814-1871 年) のことであろう。なぜならば、1863 年ヒヴァを訪れたハンガリー出身のユダヤ人で、のちに東洋学者として活躍したアルミニウス・ヴァーンベリ (生没 1832-1913 年) が次のように述べているからである。「シュクルッラー・バイなる人物は、スルタンの宮廷に 10 年間住んでいた。彼について私はおぼろげに覚えていた。なぜなら私は、現在の外相であるアーリー・パシャの邸宅で何度か彼に会ったからである」と [Vámbéry 1864: 152]。1861 年アーリー・パシャは新スルタン・アブデュルアズィーズ (在位 1861-1876 年) のもとで短期間大宰相を務めたのち、同年から 1867 年までオスマン帝国の外相を務めた。
- 7) ロシア帝国外交政策文書館などの関連史料の一部は、Serebrennikov 1914a, Serebrennikov 1914b に公開されている。またトルコ共和国総理府オスマン文書館に所蔵され、現在公開されているシュクルッラー・アガのオスマン帝国への派遣に関わる史料は、以下の通りである。1848 年から 1850 年にかけての第 1 回の派遣に関しては、シュクルッラーのイスタンブル滞在中支給された日当、帝国造船所の視察に関する文書、スルタン・アブデュルメジドからヒヴァ・ハンへの返書の草稿 (Saray 2003: 290-291; Sarmay 2004: 50, 58-61)、1854 年から 1861 年にかけての第 2 回の派遣に関しては、シュクルッラーが奉呈した進物とそれに対する返礼品に関する文書 (Binark 1992: 28)、彼の宰相宛書簡、帰国時期延期の請願に加え、彼のイスタンブル滞在中ヒヴァのサイイド・ムハンマド・ハン (在位 1856-1864 年) がオスマン帝国に派遣した使者の到来に関する文書、スルタン・アブデュルアズィーズからサイイド・ムハンマド・ハンへの返書である (Mustafayev and Serin 2011: 191-197, 200-201)。オスマン文書館にはさらに未公開の関連文書が所蔵されていると考えられるが、それらの考察は別稿を期したい。

## I シュクルッラー・アガのロシア、 オスマン両帝国への派遣（1846-1850 年）

1846 年 10 月 2 日（ヒジュラ暦 1262 年シャッワール月 11 日）、ムハンマド・アミン・ハンはシュクルッラー・アガとクルチ・ニヤーズ・バイをロシアに派遣した [Jāmi': 70]。しかしヒヴァの年代記は、ロシア滞在中の使節の行動については何も述べていない。そのためこの点はロシア側の文書によって再構成せざるをえない。それによると、2 人が率いる使節団は、ヒヴァからロシアに向かう隊商とともに露暦 1846 年 11 月 20 日から 11 月 22 日にかけてオレンブルグに到着した [AVPRI: f. 161, I-6, op. 5, 1846 g., d. 2, ll. 9ob.-10.]。その後クルチ・ニヤーズ・バイが病気になり、滞在が延びたが、露暦 1847 年 2 月 15 日に一行はオレンブルグを出発した<sup>8)</sup>。同 2 月 22 日から 24 日にかけてカザン、同 3 月 1 日にモスクワに滞在し、9 日ごろサント・ペテルブルグに到着した。彼らはムハンマド・アミン・ハンからニコライ 1 世に宛てた 2 通の書簡を持参し、同 4 月 7 日ニコライ 1 世に拝謁した [AVPRI: f. 161, I-6, op. 5, 1846 g., d. 2, ll. 31, 39, 41, 42, 51, 68, 82]。こののち、一行は次にあるようなサント・ペテルブルグの施設を視察した [AVPRI: f. 161, I-6, op. 5, 1846 g., d. 2, ll. 80, 81, 83, 86, 102, 114, 115, 116]。

- 4 月 7 日 分領農学校 Udel'noe zemledel'cheskoe uchilishche
- 4 月 8 日 鉦山学校博物館 Muzeum Gornogo instituta
- 4 月 9 日 科学アカデミー博物館 Muzeum Akademii nauk
- 4 月 10 日 サント・ペテルブルグ造幣局 Sankt-Peterburgskii Monetnyi dvor
- 4 月 11 日 帝室公共図書館 Imperatorskaia Publichnaia biblioteka
- 4 月 14 日 技術大学校 Tekhnologicheskii institut
- 4 月 15 日もしくは 17 日 帝室磁器硝子工場 Imperatorskii farforovyi i stekliannyi zavod
- 4 月 17 日 帝室アレクサンドロフスク工場 Imperatorskaia Aleksandrovskia manufaktura

その後日付は不明だが、ニコライ 1 世からの下賜品を受け取ったのち、サント・ペテルブルグを出発したヒヴァ使節団一行は、露暦 1847 年 5 月 8 日から 17 日にかけてモスクワに滞在し [AVPRI: f. 161, I-6, op. 5, 1846 g., d. 2, l. 205]、1847 年 8 月 20 日（ヒジュラ暦 1263 年ラマザーン月 8 日）にヒヴァへと帰還した [Jāmi': 90]。

このように、ヒヴァ使節団はサント・ペテルブルグ滞在中、当時ロシア帝国でも先進的な諸施設を視察した。しかしこうした視察で得た見聞が、その後のヒヴァ・ハン国における

---

8) オレンブルグとサント・ペテルブルグの往還には、アイトフが同行した。この人物については、Sultangaliev 2008 を参照。

先進的な施設の導入に結びついたかどうかは、明らかではない。

1847年8月ヒヴァに帰還したシュクルッラー・アガは、明けて1848年4月24日（ヒジュラ暦1264年ジュマダーI月20日）、ムハンマド・アミン・ハンによって、クトゥブッディーン・ホジャ・シャイフルイスラームとともにルーム、すなわちオスマン帝国に使者として派遣された〔*Jāmi'*: 112〕。道中、クトゥブッディーン・ホジャは病没した〔*Jāmi'*: 145〕。一方シュクルッラー・アガは、1848年12月4日（ヒジュラ暦1265年ムハッラム月8日）より少し前に、無事イスタンブルに到着し、オスマン帝国に入朝する東方諸国からの使節と同じ待遇で、帝国財務省から日当1.15クルシユを支給されながら、スルタン・アブデュルメジド（在位1839-1861年）の御召を待つことになった〔Sarinay 2004: 50〕。その間シュクルッラー・アガは、帝国造船所 Tersâne-i Âmire の訪問を希望し、1849年4月17日（ヒジュラ暦1265年ジュマダーI月24日）にその許可を得ている<sup>9)</sup>。その後日付は分からないが、スルタンに拝謁したのち、イスタンブルを出発して〔BOA: A.MKT.NZD 7/78〕、1850年9月下旬（ヒジュラ暦1266年ズールカアダ月中旬）にヒヴァへと帰還した〔*Jāmi'*: 145〕。

## II シュクルッラー・アガのロシア、オスマン両帝国への 派遣目的に関する考察

シュクルッラー・アガのロシア派遣の目的は何であったのか。ロシア帝国外交政策文書館に所蔵されている、ムハンマド・アミン・ハンからニコライ1世に宛てられ、露暦1847年3月29日にシュクルッラー・アガたちがニコライに奉呈した、チャガタイ・トルコ語で書かれた2通の書簡（史料①②）と、ムハンマド・アミン・ハンがスルタン・アブデュルメジドに宛て、シュクルッラー・アガが持参した書簡のオスマン・トルコ語梗概（史料③）の内容を比較検討しながら、考えていきたい。

### 史料①<sup>10)</sup>

〔前略〕この愛情に満ちた日々に、至高にして祝福されたる、とこしえなる天の定めにより、高き地位にある、天のように高い太陽のような御位におわした朕の兄たるお方は来世に旅立たれました。至高なる神——彼の名を榮譽あるものとならしめよ——の恩恵がこの至高なる宮廷の窮状をお包みになり、相伝し正当なる王朝の玉座は、公正なる朕に伝わり、朕の臣民たちは公正なる保護のもとで平安を得ました。古より現在に

9) 帝国造船所以外の機関、施設への訪問については明らかではない。

10) 引用文中の〔 〕は、原文にはなく、本論執筆者が補った部分である。

至るまで、〔ヒヴァとロシアの〕両王朝の間にいかなる対立も衝突もなく、ともに喜びを分かち合い、悲しみも分かち合い、それを伝えあってきました。そのため、忠実なるクルチ・ニヤーズ・バイを、貴国に赴き、天にまします故ハンへの哀悼を知らせ、至高なる神の恩恵により朕が統治の玉座についた祝いを〔ロシア皇帝〕陛下にお伝えし、また朕の兄弟のようなお方のご機嫌をうかがうために、貴国に派遣しました。この者が貴殿のもとで述べることは朕の言葉であり、真実です。この親書は 1262 年〔西暦 1845/46 年〕に書かれました〔AVPRI: f. 161, I-6, op. 5, 1846 g., d. 2, l. 4b.〕。

## 史料②

〔前略〕高位におわし、偉大さと壮麗さを持ち統治を行った勝利者の父たる朕の父、故アブルガーズィー〔アッラークリ・ハン〕陛下の治世、そしていと高く天と太陽ほどの高位におわした朕の兄、故アブルガーズィー〔ラヒームクリ・ハン〕陛下の治世に、ロシア国王である大皇帝と友好の礎を築いて和平 *ṣulḥ* を締結し、過去に両国間で起きた敵対の原因となった諸案件を忘却し、両国は一つの国の如くなり、互いに商人たちが往来し、貴国の臣民は自ら古くからの慣習に従いロシア国王に服従し、古くからムスリムの土地に住む臣民は以前のように天の花園のようなホラズムの国王に服従し、相互に決して相手の臣民に干渉をしないと約束し、条約 *'ahdnāma* を結びました。現在、いと高き神の思し召しが朕の幸運と偉大さを助け、統治の玉座は朕が座すことで安んじられました。朕は、祈りを捧げるべき故人〔アッラークリ・ハン〕と太陽のごとく輝ける兄〔ラヒームクリ・ハン〕が結んだ約条を固く守り、その陛下たちが行ったように、我々もまた同じ道を歩みたい、という明らかな思いでいます。しかし現在、朕の耳と朕の宮廷の従者たちの一部には、古より我々が領有する諸方の土地に要塞が建設されている、という知らせが届いています。こうした行為は明らかに友好への違反であり、友好関係を確立した約条の侵犯です。そこで、これらの行為を調査するために、朕は忠実にして信頼の置けるシュクルラー・アガを、そちらに赴いて交渉し、これらの行為が我らの友たる大皇帝陛下に知られているのか、その許可や命令によって行われているのか、あるいは国境にいる人々が行った行為なのかを詳らかにするために、貴方の許へと派遣しました。こうした行為により礎が崩されてしまった約条を固く守り、以前のように友好関係を保ち、両国を平安にし、両国臣民を安心させることを望みます。上述の人物が述べる言葉は朕の言葉であり、真実であるをご理解ください。この親書は 1262 年〔西暦 1845/46 年〕に書かれました〔AVPRI: f. 161, I-6, op. 5, 1846 g., d. 2, l. 4v.〕。

史料①は、ラヒームクリ・ハンの死去とムハンマド・アミン・ハンの即位を知らせ、あわせてニコライ 1 世の消息をうかがうという儀礼的な内容の書簡である。これに対して史料

②は、ヒヴァ領内にロシア側が要塞を建設していることへの抗議が述べられた書簡である。史料②は以下のような内容に要約できよう。1) かつてヒヴァ、ロシア両国間で起きた諸事件により、敵対関係が生じた。2) ムハンマド・アミン・ハンの先々代アッラークリ・ハンと先代ラヒームクリ・ハンの治世に、ヒヴァ、ロシア両国間の敵対の要因となった諸事件を相互に忘却することを条件に和平 *şulh* または条約 *'ahdnâma* を結んだ。その和平により、両国の商人の往来と、現状を追認するかたちでの両国臣民の服従を認め合った<sup>11)</sup>。3) しかしロシア側は、ヒヴァ領であるはずの土地に要塞を建設している。それは明らかに両国が締結した和平の侵犯であり、その詳細を知るためにシュクルラー・アガをニコライ1世のもとに派遣した、という内容である。

この史料②の内容と類似の内容が記されているのが、史料③のムハンマド・アミン・ハンからオスマン帝国のスルタン・アブデュルメジドに宛てた書簡の梗概である。

### 史料③

ホラズムの統治者ムハンマド・エミン・バハードゥル・ハンより王者たる陛下〔スルタン・アブデュルメジド〕の尊き御許に奉呈された書簡の梗概

これより前、ロシア人はスルタンたちの諸慣習に反して、ハンたちの諸規則に背いて、つねに当方の商人を捕虜としていました。のちにホラズムの政権とロシアの政権との間で和平が結ばれ、ツァーリのもとで捕虜となっていた我らの人々の道を開放して帰還させたため、当方にいたロシアの捕虜たちもその王国へと帰還させられました。そしてこの合意によって両国が和平と誠実さの礎を強固にして、これより後、両国間で対立の跡が残らないように、一度たりとも対立や紛争が起こらないように、と約束と約条の礎が確たるものとなりました。この間に、先の国〔ロシア〕は約条を破り、イスラームの民に対して優勢さと敵意を表し、イスラームの地への侵略によって要塞の建設を始め、この悪しき行いのゆえに信徒たちの心に動揺と失意をもたらしました。カリフ位の拠り所にして陛下たる貴きお方〔スルタン・アブデュルメジド〕は、全くもってイスラームの民の威厳ある王者であり、あらゆる信徒たちの従うべき命令者、スルタンであり、全くもってイスラームの諸王はカリフ位を守る宮廷に仕える者であり、名だたるスルタンたちは貴方のしもべであり、そして当方のイスラームの民に生じた非力と無力は、イスラームのすべての共同体に関わることでありますゆえ、我々の状況に憐れみと同情を、そして貴方においてロシアの役人と話し合いをなさり、そのくのにの圧制と圧力による暴力を少なからしめ、イスラームの民よりこの圧制と試練を取り除くことで、民をいたわる必要に応じ、王者としての憐れみと寛大さをお示しになることを望み、高貴さの拠り

11) ここでは、カザフを指していると考えられる。

所、幸いの宿り家、両聖都に巡礼を果たしたクトゥブディーン・ホジャとシュクルラー・アガが派遣されて、その者たちが申し述べるであろう話が信頼の場を見出したとのことである。[12] 65 年シャッワール月 11 日〔西暦 1849 年 8 月 30 日〕記述 [Saray 2003: 290-291]。

この史料③の書簡の内容を要約すると、以下のようになるだろう。ア) ロシア側がホラズムの商人を捕虜にした。イ) その後ホラズムの政権とロシアの政権とは互いに捕虜を交換し、和平を結び、今後対立をしないと約条を交わした。ウ) しかしロシアはこの約条を破り、イスラームの民と土地<sup>12)</sup>に対する侵略を行い、要塞を建設している。それゆえ、カリフたるオスマン帝国のスルタンは、我々イスラームの民を救うため、ロシア政府と交渉してその侵略を止めさせてほしい、という内容である。

史料②の 2) 3) と、史料③のイ) ウ) はほぼ一致する。また史料②では 1) 両国の間で起きた諸事件により、敵対関係が生じたと抽象的な内容が述べられているが、史料③のア) はロシア人がホラズムの商人を捕虜にしたと述べ、1) で指している敵対関係が生じた理由をより具体的に述べている。

史料②と史料③において述べられた諸事件の流れを、より詳細に追ってみたい。1) とア) は、1838 年に始まったロシア帝国南東境におけるヒヴァ人の拘留と財産没収から 1839-1840 年に行われたペロフスキー率いるヒヴァ遠征までの諸事件を指していると考えられよう。先に述べたように、ロシア側はこの逮捕の理由を、ヒヴァにいるロシア人捕虜の解放を求めたためであったと説明した。その後さらに行われたペロフスキーのヒヴァ遠征は失敗に終わった。1841 年当時アフガニスタンに展開していた英印軍の将校で、ヒヴァ、ロシア両国間の和平の仲介のためにヒヴァを訪れたシェークスピアは、アッラークリ・ハンとの交渉により、ヒヴァ領内にいたロシア人捕虜 416 名を解放し、ロシア領内に連れ帰った。イギリス側は、ロシア人捕虜の解放により、ロシアがヒヴァに介入する口実を失わせようとしたといわれている。そしてロシア帝国領内で拘留されていた 640 人にのぼるヒヴァ人も解放された [Browne 1921: 121, 123-124]。1842 年 3 月から 4 月にかけてヴァイス・バイ、イシュ・バイ率いるヒヴァ使節団がサンクト・ペテルブルグで、また 1842 年 11 月から 1843 年 1 月にかけてダニレフスキー率いるロシア使節団がヒヴァで交渉を行った結果、ラヒームクリ・ハンの勅令という形式で、両国間の条約が締結された [Khalfin 1974: 319-326]。ヒヴァ側はあくまで、ロシア側によるヒヴァ人の拘留、財産没収が対立の開始であると見ていて、2) イ) にあるこの条約によってそれが解決したと考えていた。

このダニレフスキーが締結に成功した条約は、ロシア側にとって不満の残るものであった。第一に、ダニレフスキーが行った交渉において、カザフ草原におけるヒヴァ、ロシア両国間

12) ここでは、ヒヴァに臣従を表明したカザフとその居住地を指していると考えられる。

の境界画定は、合意に達しなかった。ヒヴァとロシア間の条約締結直後の露暦1842年12月30日付で、ダニレフスキーがネッセリローデ外相に宛てて送った報告書では、以下のよう  
に述べられている。「私は本条約に境界画定の条項を含めることができませんでした。なぜ  
ならこの問題は、我国に利益がないままにヒヴァ政府の不信をかきたて、閣下〔ネッセリ  
ローデ〕が私に示された、ハンとその高官たちに、帝国政府の公正で誠実な目的を可能な限  
り信じさせるといふ主目的に反するかもしれないからです」と〔AVPRI: f. 161, I-5, op.  
4, 1842 g., d. 2, l. 43ob.〕。このように、カザフ草原におけるヒヴァ、ロシア両国間での境界画  
定は条約には盛りこまれなかった。

第二に、両国間の交渉においてロシア政府がカザフ草原における境界画定と並んで重視し  
たヒヴァにおけるロシア商人の交易にかかわる権利では、関税の引き下げや二重徴収の禁止、  
ヒヴァで死亡したロシア臣民の財産の本国返還などが認められた〔Serebrennikov 1914a:  
82-83〕。しかしダニレフスキーはヒヴァ側に片務的な条約案を提示したのに対し、ヒヴァ側  
は反発し、最終的には双務的な条約になった<sup>13)</sup>。これはロシア帝国領内での一斉逮捕、財産  
没収を経験したヒヴァ人にとって、同国での交易に際しての人身と財産の保護が約束された  
ことを意味している。つまりヒヴァ側はこの条約によって、自国商人のロシア帝国領内での  
保護を勝ち取ったといえる。

第三に、おそらくこの交渉において、ロシア帝国領内での一斉逮捕、財産没収によって  
被ったヒヴァ人の損害に対するロシア政府の補償が取り決められたと考えられる。ダニレフ  
スキーの帰国後、露暦1843年8月1日付でオレンブルグ総督オーブルチェフ（在任1842-  
1851年）はヒヴァ側に、オレンブルグ、アストラハンに拘留されていたヒヴァ商人への補  
償として5500チェルヴォーネツ金貨を支払うことを通知した。そして1844年に、ヒヴァか  
らホジャ・ニヤーズ・バイの息子バイジャー・バイが、この金額を受け取るためにオレン  
ブルグに到着したが、書簡の不備を理由に拒否された。しかし、1846年末にクルチ・ニ  
ヤーズ・バイとシュクルッラー・アガがオレンブルグに到着すると、ニコライ1世はオレン  
ブルグ国境委員会に対して、彼らがヒヴァに帰還する際にその金額を受け取らせ、ムハンマ  
ド・アミン・ハンのもとに届けさせるように、という命令を下した〔AVPRI: f. 161, I-6,  
op. 5, 1846 g., d. 2, ll. 258-259〕。こうしてシュクルッラー・アガたちは、1838年から1841年  
にかけてロシア帝国領内で拘留され財産を没収されたヒヴァ人に対する補償金を受け取り帰  
国することになった<sup>14)</sup>。

このように、ダニレフスキー率いるロシア使節団がヒヴァ・ハン国のラヒームクリ・ハン  
と締結した条約は、ロシア側にとっては不満が残る内容だった。条約にはカザフ草原におけ  
る両国間の境界画定は盛りこまれず、その規定は双務的な内容となり、帝国領内におけるヒ

13) ダニレフスキーに同行したバズィネルは、「同一の諸権利は、ロシアに来るであろうその臣民の  
ために、ハンにも認められた」と述べている〔Baziner 1968: 150〕。

14) ハルフインはこの補償金が支払われなかったと述べている〔Khalfin 1974: 348-349〕。

ヴァ商人の保護、損害賠償の責任を負った。付け加えれば、ヒヴァにいたロシア人捕虜に対するヒヴァ側の補償が議論された形跡はなかった。そして懸案となったカザフ草原におけるヒヴァ・ロシア両国間の境界画定問題を解決すべく、1845 年ごろからニコライ 1 世は、ヒヴァとの交渉抜きで、カザフ草原西部、南部における実力行使、具体的には要塞建設を推進することで、実効支配の確立を試みるようになった。具体的にそれは、マンギシュラク半島におけるノヴォ・ペトロフスク要塞の建設とシル川下流域におけるライム要塞の建設であった [AVPRI: f. 161, I-6, op. 5, 1846 g., d. 2, l. 131]。ロシアの中央アジア軍事征服に関して最も包括的な記述があるテレンチエフの著作によれば、オーブルチェフは、カザフ中ジューズのケネサルの反乱への対応という口実で、1845 年トゥルガイ川岸にオレンブルグ要塞、イルギズ川岸にウラリスク要塞を建設させた。また 1846 年には、カスピ海東岸のマンギシュラク半島トゥブ・カラガン岬にノヴォ・ペトロフスク要塞を建設させた<sup>15)</sup>。さらに 1847 年オーブルチェフ自らが指揮して、シル川下流域沿岸のジャーン・カラの下流にライム要塞、1848 年アラル海岸にコス・アラル港を建設した。そして 1848-1849 年には 2 隻のスクーター「ニコライ」と「コンスタンチン」がアラル海の探査を行った。こうしたロシア軍の動きに対し、1847 年 8 月ジャーン・カラのヒヴァ人は反撃を試み、シル川を渡河してロシア「臣民」であったカザフを襲撃したという。一方、ライム要塞から出撃したロシア軍は、カザフのジャーン・ホジャの協力や、ニコライ号の砲撃による掩護を受けながらジャーン・カラを攻撃した。ロシア側はシル川をヒヴァとの境界と見なしていたため、ロシア軍自体はシル川を渡河せず、ジャーン・ホジャ率いるカザフが渡河してジャーン・カラを占領したのだとテレンチエフは述べている。また同じテレンチエフによると、1847 年 11 月末、1848 年 3 月、5 月の 3 度にわたり、ヒヴァ軍がシル川下流域に向けて遠征を行ったが、ライム要塞を攻撃はせず、周辺のカザフに対して略奪を行いつつ、ロシア軍と小規模な交戦をして撤退したという [Terent'ev 1906: 203-209]。

これに対しヒヴァ側は、まさに 3) とウ) にあるように、シュクルラー・アガたちをロシアに派遣して、ノヴォ・ペトロフスク要塞建設に対する抗議を行い、さらにオスマン帝国のスルタンにロシア帝国への外交的働きかけも要請した。しかしロシア側はニコライ 1 世からムハンマド・アミン・ハンに対する返書の中で、この要塞は通商路の安全を確保し、これらの地点に秩序を確立するため以外の目的はなく、ヒヴァとの関係において、友好以外の希望などはないと説明しただけであった [Serebrennikov 1914b: 78]。さらにネッセリローデ外相は、露暦 1847 年 5 月 9 日付のムハンマド・アミン・ハンに宛てた書簡の中で、ヒヴァ側がロシア臣民であるカザフへの介入を続けていることに懸念を表明した [Serebrennikov 1914b: 166]。これに対しヒヴァ側も反論をしたようだ。1848 年 7 月 22 日

---

15) 同要塞は、ペロフスキーが建設したカイダク湾に建設したペトロ・アレクサンドロフスク要塞を移転したものと位置づけられた [Terent'ev 1906: 203]。

(ヒジュラ暦 1264 年シャーバーン月 20 日) 付でハン国の高官ベク・ニヤーズ・ディーヴァーンベギがオーブルチェフに宛てた書簡 (史料④) を紹介しよう。

#### 史料④

〔前略〕この大変喜ばしいときに、友好のために送り、クルム・バイが携えた親書がお手許に届き、その内容をご存じかと思えます。〔その内容は、〕以前築かれた友好の礎は強固になり、諸約条は守られてきました。〔このことは〕すべて明らかです。もちろんロシア国の大ハンと高官たち全員をご存じのとおり、カザク〔カザフ〕の諸ウルスのうち、アーリム、チュマン、アダイ、タブンは、天にまします神の影たるアブルガーズイー・ムハンマド・ラヒーム・バハードル・ハン―神よ天の樂園にある彼の居場所を高めたまえ一の治世から、この喜ばしい今に至るまで、スルターン位の宿り家たるホラズムの統治者によって統治されてきました。〔彼らは〕臣民となり、家畜からのザカート(イスラームの聖法にもとづきホラズムの王の国庫に届けています。そしてその陛下の治世に、ロシア国から来た使者たちは、友好的な諸儀礼を行い、友好以外に何も求めませんでした。クルグズ・カザク<sup>16)</sup>に介入することはありませんでした。現在、紛争のもとになることで、その調査のためにロシア国王のもとから来たニキフォロフにも伝え、そして万人に明らかなことは、カザクの諸ウルスのうち上述の諸部族 *tayifa* は、ホラズム国王の臣民であり、彼らが夏季に夏営し、冬季に冬営する土地は、ホラズム国に属しているということです。そしてロシア国王が天の花園のようなホラズムの国王と友好を固めようと望み、これまでと同じように両国間での往来を望むのであれば、シル〔川岸〕とマンギシュラク〔半島〕に建設した要塞を破壊し、そこにいる人々を引き上げさせてください。高き位にあるイスラームの王にして、勝利の旗を掲げるスルターン陛下〔ムハンマド・アミーン・ハン〕は、シルとマンギシュラクに要塞を建設し、そこに軍隊を置き、商人や臣民たちに危害が加えられないように保護するおつもりであり、彼らの安全を保つことは〔陛下の〕責務です。そうすれば、これまでの慣習に従い、両国間の友好の礎は終末の日に至るまで確固たるものとなるでしょう。もしこれまでの慣習を守らず、自国の強さや国土の人口の多さ、広さを持って上述の諸要塞を破壊せず、その土地を奪おうと考え、またそうした所業が自分の強さにふさわしいと考えるのであれば、それは仕方ありません。イスラームの王たる陛下の臣下たちもまた、こうした行

16) 19世紀ヒヴァ・ハン国の史料においてカザフは、「カザク Qazaq」と記された。一方、帝政期のロシア語文献では、カザフは「キルギズ Kirgiz」、クルグズは「カラ・キルギズ Kara-kirgiz」と記された。ここに現れる「クルグズ・カザク Qirghiz Qazaq」という表現が、クルグズとカザフという2つの集団を指すのか、当時のヒヴァとロシアの文献においてカザフを指す表現を並列させたものなのかは明らかではない。

いに対抗するため天佑神助を求め、全能なる神によって定められ、イスラームの民に実行することが求められ、至高なる神がその実行を求めるあらゆることに努力し、きっと現世と来世の幸福と榮譽を得るでしょう。上述した人々<sup>17)</sup>が書簡を届け、帰還の許可を求めましたので、私たちは返事を与え、忠実なるイシュ・バイを彼らに同行させました。そのバイが言う言葉はすべて真実であるにご了承ください。シャーバーン月 20 日（金）〔1848 年 7 月 22 日〕に本書簡は書かれました [AVPRI: f. 161, I-6, op. 5, 1846 g., d. 2, l. 3]。

この書簡（史料④）において、ペク・ニヤーズ・ディーヴァーンベギは、オーブルチェフに対して以下の内容を伝えている。A) ヒヴァはロシアとの和平あるいは条約を遵守している。B) カザフのうち、アーリム、チュマン〔チョメケイ、シヨメケイ〕、アダイ、タブンの諸部族は、ムハンマド・ラヒーム・ハンの治世からホラズム（ヒヴァ・ハン国）の支配下に入り、税を納めてきており、それに対してロシアも介入はしてこなかった。C) 上述の諸部族がヒヴァの臣民であり、彼らの夏営地、冬営地のある土地もまたヒヴァ領であり、ロシア使節ニキフォロフにも、そのことを説明した。D) しかしロシア側はそれらの諸部族が遊牧するマンギシュラク、シル川流域に要塞を建設しているが、そうした要塞を撤去してほしい。それらの土地での隊商と臣民の保護はムハンマド・アミン・ハンの責務である。E) もし撤去しないのであれば、ヒヴァ側も神助を得て実力行使をする、という内容である。

ヒヴァの宮廷史家ムーニスによれば、1812 年、1820 年の二度にわたりムハンマド・ラヒーム・ハンは、シル川下流域に冬営地をもつカザフ小ジュズの諸集団に対して、冬季に軍事遠征を行った。こうした遠征は示威と略奪が主目的であったとされるが [小前 2001: 50-51]、ムハンマド・ラヒーム・ハンがカザフのシヨメケイの有力者から服従の表明を受け、シル川下流域のカザフからは徴税を行った [Firdaws: 861-884, 1052-1060]。さらにアックラクリ・ハンは、1832 年ごろからウズベク・キプチャク部族の有力アミールの一人ホージャ・ニヤーズ・ビーをシル川下流域に派遣し、要塞ジャーン・カラを建設させて、この地に遊牧をするカザフのアーリム、シヨメケイから徴税を行うとともに、オレンブルグとブハラを結ぶ交易路で隊商交易に従事する商人からも徴税を行った<sup>18)</sup>。一方で、1830 年代中葉までロシア側がカザフに対するヒヴァ側の「支配」に抗議をした形跡はない。

このように、カザフの帰属とシル川下流域の支配をめぐるヒヴァ、ロシア両国が明確な対

17) 書簡内に具体的な人名は挙げられていない。

18) [塩谷 2014: 86]。ただしヒヴァ・ハン国のシル川下流域における「支配」は、こうした要塞の建設と徴税に限られていたようである。またカザフ側でも、ヒヴァへの税の支払いを拒否し、徴税のために来た高官を追放または処刑することもあった [Riyāz: 751a-752a]。さらに年代記から、アダイ、タブンの有力者から服従表明や税の支払いがあった事実は確認できない。これらの点から、カザフ草原において、要塞の建設と徴税という目に見えるかたちでヒヴァ・ハン国が直接支配を確立しようとしたのは、シル川下流域に限られていた可能性がある。

立状態に陥ったのは、1838年帝国領内のヒヴァ人の拘留、財産没収および1839-1840年のペロフスキーのヒヴァ遠征以降であったと考えられる。ダニレフスキー使節団のヒヴァ派遣によって締結された条約において、ロシア側はカザフの帰属をめぐる交渉を棚上げした。そして1846年ごろからカザフ草原における要塞建設を進めた。これに対して、ヒヴァ側は交渉を通じて、つまりシュクルッラー・アガの使節団などを通じたロシアへの直接、オスマン帝国の仲介を期待して間接の抗議を続けた。そしてヒヴァ側は、いささかの誇張はあるものの、ムハンマド・ラヒーム・ハンの治世以来ヒヴァに服従を表明し、税を支払ったカザフの諸集団が遊牧する地域に対する支配権を主張し、ロシア側にそれを通知していた。要するに、ヒヴァ側はカザフ草原での境界画定をめぐる交渉を継続しようとしたが、ロシア側は1846年ごろから軍事的手段による同問題の解決に転換した。しかし、1847年8月シル川下流域にあったヒヴァの要塞ジャーン・カラをめぐる武力衝突が起きると、ヒヴァ側も軍事的な抵抗を試みるに至った。ヒヴァの年代記によれば、ロシアの「侵略」に対し、1847年10月11日（ヒジュラ暦1263年ズールカアダI月1日）から1848年1月24日（ヒジュラ暦1264年サファル月17日）にかけてラフマーンベルディ・ビー、また1848年2月24日（ヒジュラ暦1264年ラビーI月19日）から同年4月7日（ヒジュラ暦1264年ジュマダーI月3日）にかけてフダーヤール・ビー、1848年3月21日（ヒジュラ暦1264年ラビーII月15日）から同年6月29日（ヒジュラ暦1264年ラジャブ月27日）にかけてヴァイス・ニヤーズ・バイ率いる遠征軍をそれぞれ、カザフの反徒の懲罰とロシア軍の撃退のためにシル川下流域へと派遣した。これらの遠征軍の規模は明らかではない。ラフマーンベルディ・ビー率いる遠征軍は、ロシア軍が籠城する要塞、つまりライム要塞を攻撃したが、従軍した有力アミールたちが戦死し、明確に得られた戦利品はラクダ80頭と捕虜2人だけであったという。フダーヤール・ビー率いる遠征軍はロシア軍の要塞周辺で遊牧するカザフだけを襲撃して、捕虜と戦利品を獲て帰還した。そしてヴァイス・ニヤーズ・バイの遠征軍については、具体的な戦闘の記述はなく、捕虜や戦利品への言及もない [Jāmi': 103-111]。このように、ロシア軍のシル川下流域におけるライム要塞建設およびジャーン・カラの占領と破壊という事態を受けて、ヒヴァ側は軍事的な反撃を試みたが、不成功に終わった。そしてフダーヤール・ビー率いる遠征軍のヒヴァ帰還から17日後の1848年4月24日に、シュクルッラー・アガたちはオスマン帝国に派遣され、スルタンによるロシア側への外交上の働きかけを要請したが、すでに時は遅かった。1848年7月ベク・ニヤーズ・ディーヴァーンベギの書簡が書かれた時点で、ロシア軍によるシル川下流域の実効支配は確立されていた。

## 結 論

本論は、コングラト朝ヒヴァ・ハン国の君主ムハンマド・アミン・ハンが1846年、1852年の2度にわたりロシア帝国に、また1848年、1854年の2度にわたりオスマン帝国に

派遣したシュクルッラー・アガの使節行に注目し、彼がロシア、オスマン両帝国にもたらしたムハンマド・アミン・ハンの書簡の内容を検討することで、その派遣の背景にあったヒヴァ=ロシア関係の推移について考察を行った。

これまで1830年代後半から1840年代にかけてのヒヴァ=ロシア関係は以下のように述べられてきた。ニコライ1世の勅令により、1838年帝国南東境にいたヒヴァ臣民全員が拘留され、1839-1840年には「冬の遠征」と呼ばれる、ペロフスキー率いるロシア軍のヒヴァ遠征が行われたが、失敗に終わった。その後ロシアは実力行使から交渉へとヒヴァに対する姿勢を転換し、その結果露曆1842年12月27日付のラヒームクリ・ハンの勅令（ファルマーン）公布という形態で、両国間の条約が締結された。この条約はヒヴァ側の違反によって破られ、1847年にはロシア軍が再び実力行使を行い、カザフの冬営地があり、オレンブルグ・ブハラ間の隊商路が通る要衝であったシル川下流域において、ヒヴァ側の要塞を占領・破壊するとともに新要塞を建設した、と。

しかしシュクルッラー・アガの使節行、およびムハンマド・アミン・ハンがニコライ1世、アブデュルメジド2世に宛てた書簡を見ていくと、これまでのヒヴァ=ロシア関係の叙述とは異なる諸事件の推移を読み取ることができる。1838年以降のロシア帝国領内におけるヒヴァ臣民の拘留と財産没収に端を発したヒヴァ、ロシア両国間の対立は、1843年1月ロシア使節ダニレフスキーと締結した和平によって解決した。ヒヴァ人はロシア領内で従前通り商取引を行うことができ、人身と財産の保護を受け、没収された財産の補償も受けることになった。しかし1846年ごろからロシア側はカザフ草原の、とりわけカスピ海東岸のマンギシュラク、シル川下流域で要塞建設を進めた。ヒヴァ側はこれをロシア側による和平の侵犯、イスラームの民とその土地に対する侵略とみなした。それゆえヒヴァ側はロシア帝国に直接抗議をするとともに、ムスリムの盟主たるカリフの地位にあると見なしていたオスマン帝国のスルタン・アブデュルメジドに、ロシア人の「侵略」をやめさせる外交的働きかけを要請した。しかしムハンマド・アミン・ハンのスルタン・アブデュルメジドへの要請は、同時代のコーカンド・ハン国の君主たちがオスマン帝国のスルタンたちに行った要請同様、期待した成果を得ることはできなかったようだ<sup>19)</sup>。

19) たとえば、1837年コーカンド・ハン国のムハンマド・アリー・ハンがオスマン帝国に派遣した使節は、帝国からの軍事的支援や鉱山技師派遣を要請したが、拒絶されている。その理由は帝国とコーカンドは地理的に離れているうえ、アルメニア人やギリシア人といった異教徒からなる技師たちを派遣したとしても、同郷人も同宗者もないコーカンドにとどまることはできないからである、というものであった [Komatsu 2006: 971-972]。1848年6月29日（ヒジュラ暦1265年ラマザン月10日）付のヒヴァ・ハン国のムハンマド・アミン・ハンに対する返書の草稿においては、ヒヴァ・ハンからの要請について「偉大なるロシア政府に友好的にしかるべき照会が行われました。そしてその偉大なる政府と友好的な関係でいることもまた当方が希望するところであるとの説明がなされました」とある [Sarinay 2004: 58-60]。サライはこれをロシア大使 Russian ambassador に対する照会とし、「ロシア大使は同政府もまたヒヴァとの平和的、友好的関係を望んでいることを我々に保証した The Russian ambassador assured us that his government

先行研究は、ヒヴァ側がロシア側の再度の軍事遠征を恐れて露暦 1842 年 12 月 27 日付の条約を締結したが、その後条約に違反する行動をとったという点を強調してきた。この条約はロシア側に有利な条約であったとの指摘もなされてきた。しかし本論が示したように、この条約は、1839-1840 年のペロフスキーのヒヴァ遠征前後からヒヴァ側で最大の関心事であった、ロシア領内で拘束・財産没収を受けたヒヴァ商人への補償や、帝国領内でのヒヴァ臣民の人身・財産の保障を約していた。ヒヴァ側はロシア側に対する要求を飲ませることに成功していたのである。また、条約ではカザフ草原における両国間の境界画定は棚上げされたにもかかわらず、オレンブルグ総督が指揮するロシア軍は、1846 年カザフ草原西部のマンガシユラク、1847 年カザフ草原南部のシル川下流域に要塞を建設し、後者での要塞建設がヒヴァ側との軍事衝突を招いた。それゆえ、露暦 1842 年 12 月 27 日付の条約はロシア側に有利であり、条約を侵犯したのはヒヴァ側であったと断言することはできない。その後ムハンマド・アミーン・ハンは、再度シュクルッラー・アガを 1852 年ロシアへ、1854 年にはオスマン帝国へと派遣している。これについては別稿で検討したい。

## 参考文献

- AVPRI : Arkhiv vneshnei politiki Rossiiskoi Imperii.
- Binark, İ. et al. (ed.) (1992) *Osmanlı Devleti ile Kafkasya, Türkistan ve Kırım Hanlıkları arasındaki Münâsebetlere dâir Arşiv Belgeleri (1687-1908 Yılları arası)*, Ankara.
- BOA : Başbakanlık Osmanlı Arşivi.
- Firdaws* : Shîr Muḥammad Mirâb Mûnis and Muḥammad Rizâ Mirâb Âgahî, *Firdaws al-iqbâl : History of Khorezm*. Yuri Bregel (ed.), Leiden, 1988.
- Gulshan* : Muḥammad Rizâ Mirâb Âgahî, *Gulshan-i dawlat*. Institut vostochnykh rukopisei Rossiiskoi akademii nauk, Tiurkskie ruk. inv. No. B1891.
- Jâmi'* : Muḥammad Rizâ Mirâb Âgahî, *Jâmi' al-vâqi'ât-i Sulṭâni*. Nouryaghdî Tashev (ed.), Samarkand-Tashkent, 2012.
- Mustafayev, Ş. and M. Serin (2011) *Osmanlı Belgelerinde Merkezi Asya Tarihi*, Vol. 1, Samarkand.
- Riyâz* : Muḥammad Rizâ Mirâb Âgahî, *Riyâz al-dawla*. İstanbul Üniversitesi Kütüphanesi, Türkçe Yazmalar N. 82.
- Sarinay, Y. et al. (ed.) (2004) *Belgelerle Osmanlı-Türkistan İlişkileri (XVI-XX. Yüzyıllar)*, Ankara.

↙ has also wanted peace and friendly relations with Khiva」との英訳を提示しているが、原文からは確認できない [Saray 2003 : 289]。上述の草稿の一文は、オスマン帝国政府はロシア側に照会をしたものの、一方でロシアとオスマン帝国との友好関係も尊重したい、とヒヴァ側に説明したようにも解釈できる。この照会がいつ、誰に対して行われ、その結果ロシア政府がどのような反応を示したのかについて、今後の考察が必要である。しかし少なくとも、シル川下流域をめぐるヒヴァ、ロシア両国間の対立において、ヒヴァ側はオスマン帝国を通じてロシア側からの譲歩を引き出すことはできなかった。

- Zubdat* : Muḥammad Rizā Mirāb Āgahī, *Zubdat al-tavārikh*. Khilola Nazirova (ed.), Tashkent, 2016.
- Agzamova, G. A. et al. (2016) *O'zbekistonda elchilik xizmati tarixidan : talqin va tahlil*. Toshkent.
- Allaeva, N. (2018) *Xiva xonligi diplomatiyasi : XVI-XIX asrlar*. Toshkent.
- Andican, A. A. (2009) *Osmanlı'dan Günümüze Türkiye ve Orta Asya*. İstanbul.
- Bacqué-Grammont, J. L. (1972) Tūrân : une description du khanat de Khokand vers 1832 d'après un document ottoman. *Cahiers du monde russe et soviétique* 13/2, 192-231.
- Basiner, von Th. F. J. (1969) *Naturwissenschaftliche Reise durch die Kirgisensteppe nach Chiwa*. Berlin.
- Becker, S. (1968) *Russia's Protectorates in Central Asia : Bukhara and Khiva, 1865-1924*. Cambridge, Massachusetts.
- Bregel, Y. (1978) The Sarts in the Khanate of Khiva. *Journal of Asian History* 12-2, 120-151.
- Browne, E. G. (1921) How Sir Richmond Shakespear set free the Russian Slaves at Khiva. *Journal of the Central Asian Society* 8, 121-124.
- Can, L. (2020) *Spiritual Subjects : Central Asian Pilgrims and the Ottoman Hajj at the End of Empire*. Stanford, California.
- Gulomov, Kh.* (2005) Diplomaticeskies otnosheniia gosudarstv Srednei Azii s Rossiei v XVIII-pervoi polovine XIX veka. Tashkent.
- Khal'fin, N. A.* (1974) Rossiia i khanstva Srednei Azii (pervaia polovina XIX veka). Moskva.
- Kochnev, A. V.* (2017) Khivinskii faktor vo vneshnei politike Rossiiskoi Imperii XVIII-pervoi poloviny XIX vv. // Nomai donishgoh (Khudzhandskii gosudarstvennyi universitet im. akademika B. Gafurova) 51, 26-31.
- Komatsu, H. (2006) Khoqand and Istanbul : An Ottoman Document Relating to the Earliest Contacts between the Khan and Sultan. *Asiatische Studien/Études Asiatiques* 60-4, 963-986.
- Morrison, A. (2020) *The Russian Conquest of Central Asia : A Study in Imperial Expansion, 1814-1914*. Cambridge.
- Muhammadjonov, A. R. and T. Ne'matov (1957) *Buxoro va Xevaning Rossiya bilan munosabatlari tarixiga doir ba'zi manbalar*. Toshkent.
- Niiazmatov, M.* (2010) Poisk konsensusa : Rossiisko-khivinskies geopoliticheskes otnosheniia v XVI-nachale XX v.. Sankt-Peterburg.
- Otamurodova, A. and O. Abdurahimov (2015) *Xiva elchilari*. Toshkent.
- Saray, M. (1994) *Rus İsgali Devrinde Osmanlı Devleti ile Türkistan Hanlıkları arasındaki Siyasi Münasebetler (1775-1875)*. Ankara.
- Saray, M. (2003) *The Russian, British, Chinese and Ottoman Rivalry in Turkestan : Four Studies on the History of Central Asia*. Ankara.
- Serebrennikov, A. T.* (ed.) (1914a) Turkestanskii krai. Sbornik materialov dlia istorii ego zavoevaniia. 1842 i 1843 goda. Tashkent.

- Serebrennikov, A. T.* (ed.) (1914b) *Turkestanii krai. Sbornik materialov dlia istorii ego zavoevaniia. 1847 god.* Tashkent.
- Sultangaliev, G. S.* (2008) Karatolmach, Shtabs-kapitan Mukhammed-Sharif Aitov v Kazakhskoi stepi (pervaia polovina XIX v.) // *Panorama Evrazii* 2008-2, 13-21.
- Terent'ev, M. A.* (1906) *Istoriia zavoevaniia Srednei Azii. I.* Sankt-Peterburg.
- Vámbery, A. (1864) *Travels in Central Asia : Being the Account of a Journey from Teheran across the Turkoman Desert on the Eastern Shore of the Caspian to Khiva, Bokhara, and Samarcand performed in the Year 1863.* London.
- Vasil'ev, A. D.* (2014) «Znamia i mech ot padishakha»: Politicheskie i kul'turnye kontakty khanstv Tsentral'noi Azii i Osmanskoi Imperii (seredina XVI-nachalo XX vv.). Moskva.
- Veselovskii, N. I.* (1877) *Ocherk istoriko-geograficheskikh svedenii o Khivinskom khanstve ot drevneishikh vremeni do nastoiashchego.* Sankt-Peterburg.
- Zhukovskii, S. V.* (1915) *Snosheniia Rossii s Bukharoi i Khivoi za poslednee trekhletie.* Petrograd.
- 堀川徹 (1991) シャイバーン朝とオスマン帝国——文書史料に見る交通路の変遷『西南アジア研究』34, 43-75.
- 小前亮 (2001) コングラト朝ムハンマド・ラヒーム・ハンの政権について——*Firdaws al-iqbāl*による考察『内陸アジア史研究』16, 39-59.
- 長沼秀幸 (2015) 19世紀前半カザフ草原におけるロシア帝国統治体制の形成——現地権力機関と仲介者のかかわりを中心に『スラヴ研究』62, 197-218.
- 澤田稔 (1988) 18世紀末イスタンブルのウズベク人に関する文書史料『日本中東学会年報』3-2, 198-218.
- 澤田稔 (1990) 18世紀末ブハーラー・ハーン国とオスマン帝国の交渉をめぐって『帝塚山学院短期大学研究年報』38, 1-18.
- 塩谷哲史 (2014) 『中央アジア灌溉史序説——ラウザーン運河とヒヴァ・ハン国の興亡』風響社.
- 塩谷哲史 (2018) 1842年ガージャール朝使節団のヒヴァ派遣——シヤ派捕虜解放問題と英露两国の関与について『内陸アジア史研究』33, 51-73.
- 宇山智彦 (2018) 中央アジア——カザフ草原とトルキスタン 小松久男 (編) 『中央ユーラシア史研究入門』山川出版社, 229-251.